

# 第5回 土佐の皿鉢ゼミ開催

（「特設ページ」による Web 開催）

教職実践高度化専攻（教職大学院）院生の実践研究発表「第5回土佐の皿鉢ゼミ」が、新型コロナウイルス感染症拡大防止を考慮して2020年8月19日（水）から8月25日（火）まで、オンライン「特設ページ」での研究発表資料公開ならびにメールでの質疑応答によって開催されました。

Web 開催では、まず柳林信彦専攻長より挨拶があり、高知県教育長 伊藤博明氏より、それぞれの院生の研究に対する期待が込められたお言葉をいただきました。特設ページでは、各院生の取り上げた高知県の様々な教育課題について、1年生15名及び2年生11名から研究成果の報告がなされました。それを受けて多数寄せられた研究発表に関する質問及び意見に対して回答を掲載するという流れでの開催になりました。院生たちは、関係者の方々から多くを学ばせていただき、それぞれが現時点での研究課題について多様な視点から分析することで実践的な探求ができました。ここでは、皿鉢ゼミで Web 発表した院生（26名）から、それぞれの研究課題におけるこれまでの成果と今後の課題について語ってもらいました。

## 【学校運営コース】

### M2 黒瀬小百合さん 高知県中学校教育における組織マネジメントのあり方



教諭が学校経営方針そのものに参画することができるシステムの構築を目的とし、学校の活性化のためには、当事者意識の向上、同僚性の涵養、マネジメントスキルの獲得が必要であるという仮説を立て研究しています。活性化のための手立て案として、「学年レジュメ」「学年目標の学期末振り返り」の様式や方法を考案し、実習校で実装しています。今後、手立て案の成果と実施したアンケートも含めて分析し、学校の活性化との関係を検証する予定です。

### M2 山崎弥生さん 市町村教育委員会における学校への効果的な支援の在り方～香南市の教育行政を通して～

市町村教育委員会が学校にどのような支援を行えば効果的であるかについて探るため、市町村教育委員会指導主事の仕事に関する実態把握及び支援策の1つとして考えられるスクールサポートについて検証を行いました。指導主事の多忙を軽減するためには、教育委員会内での仕事の割り振りが重要になってくると感じました。また、スクールサポーターの配置については、教員の負担感の軽減に大きくつながる可能性と配置についての課題が見えてきました。



### M1 石川真美さん 授業実践力を組織的に高める学校運営の在り方



教科の「タテ持ち」の有効な実施方法を検証することを中心として、組織力向上の在り方を求めることを研究の目的としています。そのため、教職員にインタビューやアンケート等で実態把握から行いました。所属学年の生徒理解に対する不安、ミドルの学校運営の関わり方等が課題として見えてきました。今後、課題解決に向けて、学校組織として教科部会が運用するための方策を探り、研究を進めていきたいと考えています。

### M1 中澤悠子さん 協働的に学び続ける学校を実現するための方策を探る

本研究は、年齢やキャリアに関係なく教職員が自身の持つ知見や技術を教え合い、積極的に対話しながら、より効果のある教育活動の創造を志向する「協働的に学び続ける学校」へと組織を高めることを目的とします。この学校の特徴を検討する中で、それは「専門職の学習共同体」というコンセプトと相似していることが見出されました。そこで、当コンセプトを援用しながら「協働的に学び続ける学校」を実現する方策について研究を進めようと考えています。



## 【教育実践コース】

### M2 上岡栄二さん 数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動の充実



数学的活動を充実させるために生徒に身近で興味関心を引き出すような具体的な教材を開発し、生徒が試行錯誤しながら、主体的にかつ協働しながら問題解決するような学習方法を研究しています。今年度は、昨年研究した What-If-Not ストラテジー理論に発達の最近接領域（Z.P.D.理論）を融合させ、授業をデザインし実践しました。今後も教材開発を中心に行い、数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動の充実について研究を深めていきます。

**M2 楠目安由さん 理科の資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」**

高知県中学校理科の課題「観察・実験結果に基づいて自分の考えや他者の考えを検討して改善すること」の解決に向け、メタ認知に着目し、生徒がメタ認知を発揮する手立ての開発を目指して研究を行っています。今回の血鉢ゼミでは、昨年度開発した「メタ認知的知識」「モニタリングとコントロール」「自己の思考の内省」を促す手立てを用いた授業実践、ワークシートやアンケート結果から見られた本手立ての有効性について報告しました。

**M2 竹村理志さん 自己指導能力を育成する生徒指導のあり方～セルフコントロールに着目して～**

昨年度の実態把握結果を踏まえ、今年度は中学生のセルフコントロールを育む介入プログラムの開発及び有用性の検討を行いました。先行研究を参考に自作した6種類のプログラムをパッケージ化し約2か月間実施した結果、特に中位群及び下位群にプログラムの有用性が認められました。今後は生徒アンケートの自由記述欄等を精緻に分析し、プログラムのさらなる改良に努めるとともに、他の心理尺度との相関についても検討する予定です。

**M2 横川理水さん 自己の生き方について考えを深める道徳の授業づくり**

道徳意識調査の結果及び児童の反応から、討論型道徳授業は、この「主体性」「対話性」「発見・内省」を促すことに有効性が見いだされました。特に、同一価値でステップアップ型の討論を行うことの効果が、より高くなる可能性も見いだされました。同じテーマの討論を続けることによる自己または他者との対話がより促進され、学習意欲が高まったことがうかがえます。なお、教材によって討論を仕組みにくい場合の授業計画、構想が今後の課題です。

**M1 畔元杏奈さん 中学校における「考え議論する」道徳授業の在り方**

目的は、自身の考えを表明し問題解決を図る道徳授業の実践を通して、生徒の自己決定力を養うことのできる道徳授業の在り方を見つけることです。「考え議論する」中で一人一人が行動と理由を自己決定することまで踏み込んだ授業を模索しています。自分事として捉えて考える生徒が増えましたが、考えを表明し議論する授業に至っていないと感じています。引き続き考え議論する道徳授業にするための工夫をしていきたいと思えます。

**M1 岩原朋史さん 理科教育における ICT を活用した授業に関する研究**

国際数学・理科教育動向調査(TIMSS2015)の結果から、日本の中学生は、諸外国と比べ、情意面に関する肯定的な割合が低いという課題があります。そこで、ICTを効果的に活用した理科授業実践を通して、情意面に対する課題の解決を目指しています。10月からの実習では、①理科の情意面に関する質問紙調査②授業における発話記録③振り返りシートの記述内容を基に分析する予定です。

**M1 加藤 翼さん ウェルビーイングを高める学級経営の在り方に関する研究**

学級内におけるウェルビーイングを規定する要因を探るとともに児童のウェルビーイングを高める学級経営の在り方を探ることを目的として取組みを進めています。これまでは主に先行研究を読み、ウェルビーイングに関連深そうな因子をピックアップしてきました。今後は、小学校4年生を対象に、ウェルビーイングがどの程度であるのか実態把握するために質問紙を作成し、調査、分析、介入方法を検討し、介入という形で研究を進めていきます。

**M1 笹岡久乃さん 書く力を養う英語科の教材及び学習指導開発**

英語科の課題である「書くこと」に自信を持たせ、テーマや条件に合うように書く力を養うため、授業実践では書く内容を整理し発想を広げ書くように、マッピングを使用しました。生徒は、マッピングして内容を整理したことで英作文の量を増やすことができました。テーマや条件に応じて書くことは、あまり経験していないということも明らかになり、今後も教材開発を行い生徒が主体的に協働しながら書く力を養っていくよう学習指導開発の研究をしていきます。

**M1 嶋村明日華さん ICT を活用した「深い」学びを実現する授業開発—複式学級の性質をふまえて—**

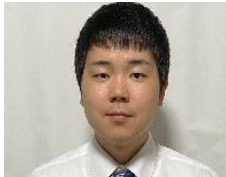
本研究では、いわゆる「深い」学びを実現するために、授業におけるICTの活用が目的です。1学期はICTの教育的意義を分析し、マッピング機能の有効性を確かめました。これから少人数でも思考やコミュニケーションを深めるためのICT活用方法について検討し、授業実践を行っていきたくて考えています。また、今年度タブレットの習熟を図った上で、来年度には外部とのコミュニケーションとしての可能性を探っていきます。

## M1 田邊元基さん 数学教育における深い学びを実現する授業の研究

数学教育における深い学びを実現するために、一般化・抽象化・統合化・記号化・形式化など数学を高度化する「垂直的数学化」に着目し、数学を高度化する活動を生徒が主体的に行うための効果的な教材と授業方法についての研究を行い、授業デザインを1つ考案しました。今後はこの授業を実践し、教材と授業方法の有用性を検証し、生徒が主体的に垂直的数学化を行うための実践的課題を明らかにしていきたいと考えています。



## M1 戸梶良輝さん 望ましい友達関係を目指した教育支援プログラムの開発～ピア・サポートの視点から～



高知県が抱える生徒指導上の諸課題を解決するために、友達関係に着目し、子供が望ましい友達関係を築くことができる教育支援プログラムをピア・サポートの視点から研究しています。文献研究から、現代の子供における「望ましい友達関係」と「望ましくない友達関係」の姿を明らかにしました。今後は、実習校の子供達の友達関係について実態把握を行い、その結果を基に教育支援プログラムを構想し、その効果を検証していきます。

## M1 徳橋佑哉さん 高等学校における生徒の認知特性と理科実験における考察が学力向上に及ぼす効果の検討

高等学校において、認知特性と理科実験における考察が学力向上にどの程度効果があるのかを研究しています。本研究のキーワードはポジティブ感情です。ポジティブ感情が高い学年は体験志向が強い反面、思考活志向は低い傾向を示します。今後は、グループワークや演示実験を通して体験場面を増やすことで、ポジティブ感情を高めます。そのうえで、観察・実験に対する価値の認知とのバランスに留意し、深い学習方略に結びつけることを目指します。



## M1 戸田哲寛さん 児童生徒理解に基づく開発的生徒指導の進め方～セルフ・エフィカシーに着目して～



自分の能力や行動にも関係するセルフ・エフィカシー（自己効力感）に着目し、生徒指導上の諸課題の未然防止に向けた開発的生徒指導の介入プログラムを研究しています。前期は、既存尺度や行動観察による小学4年生の実態把握を行いました。セルフ・エフィカシーを高めるには「制御体験」（成功体験）が最も重要であり、後期は、実態把握したものを元に、成功体験を積み重ねることができる効果的なプログラムを開発し、その有用性を検討していきます。

## M1 中村彩乃さん 数学的活動を軸とした数学授業について

通常、数学の授業の流れは、教科書に記載している順序を基に行われており、その際、教材研究やその数学的価値の分析が十分に行われていないことが現場の数学教員や数学教育学の文献から指摘されています。特に幾何学習について指導の系統性に課題があります。そこで今年度は、幾何学習の系統性を示しているファン・ヒーレの学習水準理論に着目し、それを基に指導案を考案し、授業実践を行い、有効性の検討をしていきたいと考えています。



## M1 若松柚似さん 理科の見方・考え方を働かせた科学的に探究する学習指導の在り方



「科学的な探究の過程」の充実に向けて、仮説検証型の授業づくりについて研究を行っています。仮説検証型の授業において、生徒の科学概念の形成について教師が想定することや生徒自身が科学概念の変容を見取することは授業構成や展開に有効であると考えています。実習前半は、生徒の素朴概念を想定した授業づくりを実施しました。今後は、生徒の思考を可視化する工夫も行い、仮説検証型授業や生徒の科学概念の変容について分析・検討していきます。

## 【特別支援教育コース】

## M2 池川真妃さん 小学校通常の学級における合理的配慮の在り方について—通常学級における集団指導と個別指導の調整および複数指導者でのチーム支援の在り方の検討—

通常学級においてクラスワイドな支援を用いた合理的配慮の在り方と、集団支援と個別支援の調整について検討しています。特に、学級担任の支援行動が児童の学習参加を促したことが示唆されました。また学級担任の支援行動への肯定的な評価、ふり返しを行うことで本人の積極的な気づきを促し次の支援方法や改善策につながったのではないかと考えました。今後の課題は児童のさらなる参加を促す手立ての協議の継続であり、さらに検証していきたいです。



## M2 小西留美さん 高等学校における主体的な学びを促進する授業の工夫



多様な学びのスタイルを持つ生徒が授業に参加できる授業のユニバーサルデザインについて研究しています。授業時の生徒の行動観察から学習支援ニーズを検討し、行動の背景を予測することで支援の必要な生徒の目標と手立てを考えました。支援のタイミングや方法、具体的な声かけを事前に想定し指導案に記載しておくことで確実な支援ができます。どのような工夫や声かけがどのような行動の変容を生むかを検証していきます。

## M2 近藤修史さん 子どもの発達特性に応じた「わかる」「できる」を成立させる教科指導法のあり方を探る～算数LDに焦点をあてて～

抽出個別指導と一斉指導の機能的な関連を図る指導法のあり方を検討することを目的として、第1学年児童を対象に「数処理領域」と「数概念領域」での実践研究を行いました。自作のパワーポイント教材や具体的操作等の個別指導内容を一斉指導においても活用したことで、全ての児童の計数正確性の向上につながりました。今後は加減計算を見据え、数の構成理解を促す教材の開発に取り組んでいきます。



## M2 友永しのぶさん 組織的に取り組む特別支援教育の在り方～発達障害のある生徒も過ごしやすい学級の仲間づくり～



発達障害の診断の有無に関わらず、通常の学級にいる全ての生徒に「安心して過ごせる居場所」が必要です。自作した学級雰囲気尺度によって仲間関係のアセスメントを行い、人間関係強化が必要な学級において「仲間づくり活動（PA）」を行いました。気になる生徒も学級全体もPA中に仲間に適切に関わろうとしたかアンケートから分析しました。後半は2年間の変容を特に個々の生徒に注目して分析していきたいと思えます。

## M2 前田正博さん インクルーシブ教育システム構築のための体制づくり

特別支援学校（病弱）における通級指導教室の指導方法について、実習校での実践を通して考察しました。認知・心理的特性や知能検査の結果に基づいて実態把握を行い、指導を行いました。強みを生かしながら課題に取り組むことで漢字の習得や、計算ミスの減少、活動内容のルールを理解して活動する等の教育効果が見られました。今後は①取り組んだ実践の効果検証、②在籍校との連携、の2点が課題です。



## M1 島崎やよいさん 支援が必要な児童への効果的な支援方法

通常学級において、発達障害等特別な支援が必要な児童に対して、「個」への支援として、チェックリストの活用やMIM指導、「学級」支援として、授業観察やQ-Uアンケート等を参照にしなが学級全体の良さと課題の把握、「学級担任のUDの視点」として、東京都日野市の「包み込むモデル」を活用しての特別支援教育の指導法と理解の実践という多面的なアプローチから効果的な指導法を明らかにしていきます。



## M1 土居一平さん 特別支援学校におけるライフスキルトレーニングの実践と効果 —ライフスキルトレーニングの視点に基づく道徳等の授業内容の検討—

知的障害特別支援学校における、ライフスキルトレーニング(LST)について検討することとLSTの視点を踏まえた道徳等の授業内容について提案することを目的に研究をしています。LSTとして身に付ける力は、現在や将来の生活場面を考慮することが重要です。知的障害児を対象とした道徳教育は学びの成果を行動変容やスキル獲得として考える必要があるという仮説立てて、生徒にとって現実的で体験的な学びとなる授業実践を計画していきます。



Web開催ではありましたが、個々の院生の研究が、高知県の教育課題解決に資するものであり、社会と協働して教育改革をリードしていくための取組になるであろうという期待が多く寄せられました。またコロナ禍という厳しい状況下での教育の在り方についても考えさせられました。

次回の「第6回土佐の血鉢ゼミ」は、2021年2月11日（祝）（当初の計画1月31日より変更予定）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 柳林信彦

編集者：教職実践高度化専攻ニューズレター委員

発行日：2020年9月18日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail [ks33@kochi-u.ac.jp](mailto:ks33@kochi-u.ac.jp)